

計画の目的

「展望と退避」という考え方を基盤として修士設計をすすめた。人は、周囲を見渡しやすく、しかも必要な場所には素早く隠れたり避難したりすることができる環境を好む。これを仮に、遮られない視界（展望）と、隠れたり難を逃れたりする場所（退避）とする。この考え方は、「デザイン原理」から引用した。「デザイン原理」とは、デザインにおける法則やガイドラインのことだ。代表的な例は、黄金比やフィボナッチ数列などで、数多くの「デザイン原理」が存在する。デザイン原理を参考にすることで、デザインのアイデアをまとめたり、デザインの方向性の決定において、作業を円滑に、またそのようなデザイン原理が建築の分野にも取り入れられるかどうか、を試みるのが目的だ。

展望と退避

人々は、周囲を見渡しやすく、しかも必要な場所には素早く隠れたり避難したりすることができる環境を好む。展望と退避の両方の要素をもった環境は、探検したり住んだりするのに安全だと認識され、その結果、このような要素のない環境よりも美しいと感じられる。この原理は、人間の進化の歴史に基づくもので、展望と退避が豊富な環境が、先人類や初期の人類の生存確率を向上させたことに起因する。

展望と退避の原理から、人々は空間の中央よりも端を好み、天井や頭上を覆うものがある場所、そこに外から入れる箇所が少ない（後ろや側面が封鎖されている）場所、展望が遮られない箇所が複数ある場所、安全でかくまわれているという感覚を与える場所を好むことがわかる。このような場所が好まれる傾向は、環境が危険である。または潜在的に危険であると認識される場合に強まる。展望と退避のバランスが取れている場所がもっとも好まれる。自然環境においては、展望のよい場所として、丘、山、広々とした所の近くにある木などがある。退避場所としては、洞穴、植物が生い茂った所、林冠に近く、木に登れる所などがある。

人工の環境においては、展望のよい場所として、奥行きのあるテラスやバルコニー、窓やガラスの扉が多数使用されている所などがある。退避場所としては、門や柵などを外周に設けた、天井の低い小部屋などがある。

デザインに展望と退避の原理を生かすこと目的は、人々が見られることなく見ることができる場所を作ることであると要約される。景観、住居、オフィス、コミュニティ、などを作る際に、展望と退避の原理を考慮するとよい。その空間の中に、見晴らしのよい場所を複数作り、空間の内部と外部の両方が容易に観察できるようにすることが重要だ。広いオープンな空間では、目隠しの要素（植え込みや間仕切りなど）を用いて側面や背面を塞ぐことによって、見通しを確保したまま部分的な退避場所を作り、その空間をより魅力的にする。たとえば、窓やガラスの扉で囲まれた広いスペースに、床と天井が低く狭いスペースをつなげるなど、バランスに配慮して、展望と退避の要素に使用すると最大の効果をあげる。（Design Rule Index 参照）

計画敷地の概要

設計場所として選んだ、みなとみらい「象の鼻地区」は、赤レンガパークと山下公園の間に位置する。大栈橋国際客船ターミナルのつけねから左手方向へ延びている防波堤を上から見ると、象の鼻に似ていることから、通称「象の鼻」と呼んでいる。修士設計に取り組み始めたころは、この地区は一部仮設的に使用され、その他は空地になっていた。現在、この地区でコンペが進行され、改修工事が行われている。開港 150 周年を迎える平成 21 年に向けて、広場や緑地の整備が進められている。



（資料 横浜港湾局）

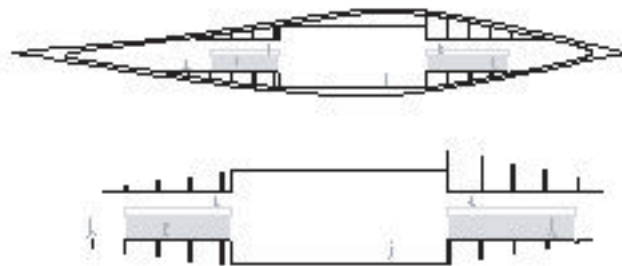


二重構造

インテリアデザインは、既に存在しているインテリア（床・壁・天井で仕切られた内部空間）を多様な方法を用い、建築との二重構造を認識したうえで、新たな用途、機能に対しての組み替え作業をおこなうことである。

方法論としての二重構造

二重構造を強く認識させるためには、空間の中にもうひとつ別の空間を入れ込む。つまり建築の中に建築を、箱の中に箱をといった建築空間と対比させる自立したシステム（装置・家具・オブジェ）を入れ込むことで、空間を組み替える方法は元の空間を大きく変化させるだけでなく、内部空間に新たに内と外といった関係を生み出し、より空間を複雑化させる。



原邸

室内の中に、さらにガラスの箱の部屋をおく。

広く均一的な計画より、より複雑でいろいろな性質の空間が生まれる

内部化された外部

建物により「内と外」が生まれる。建築においては建築を外に開き、いかに空間的・社会的に連続したものとすることができるか、がテーマであった。しかしインテリアにおいては逆に家具調度や装飾といった部屋の演劇的なものから、内部を「空間」としていかに成立させる

か、を模索してきた。この意識の違いは、根本的な違いを生んだ。建築からすれば外部を内部へ取り込み、内部は外部へ開き、いままでの「建築」という枠組みからの開放を試行してきたのである。そのため建築は箱からの脱却を計り、透明なシェルターを希求し、形式からの逸脱を探り始めた。反面インテリアでは内部としての事実を受け止め、演劇的に劇場化したイメージ装置とするか、ファインアートのようにもの自身の意味を問題とするか、ものと空間の関係性や概念的な側面を問題にするか、といった全く異なった方向へ向かっていった。外と内という対立しながら融合し、互いに求めあう複雑な関係をつくりだし、デザイン発想の契機となり、幾多の名作を生み出してきた。展望と退避の考え方である、「ひらけた場と閉じた場所」この考え方を室内にもとり入れる。半地下屋外の空間をつくることで、外と内を融合させる。



せんだいメディアテーク



住吉の長屋



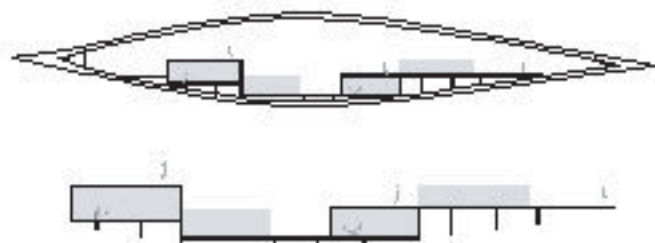
ウィークエンドハウス

上下の連続

空間の印象は体験者の立つ位置、見る方向によってはその受ける印象がずいぶん違ってくるといえる。このことはデザイナーが空間をとらえる上で、常に意識していなくてはならない大切なことのひとつだと思ふ。視線の移動に伴い変化していく空間を経験するとき、我々は天井までの高さや壁までの距離、色、素材等さまざまな事柄が人々に影響を与えることを知っている。殊に上下二層に分かれた空間を吹き抜けや階段を介してデザインする時は、空間の連続性の構築をデザインしているといえるのではないか。そして、我々はその視線の行方が上方へ向かうのか、下方へ向かうものなのか、あるいはこの双方をもつものか、心理的な効果を含めてその視線の行方を強く意識して計画をするものだ。

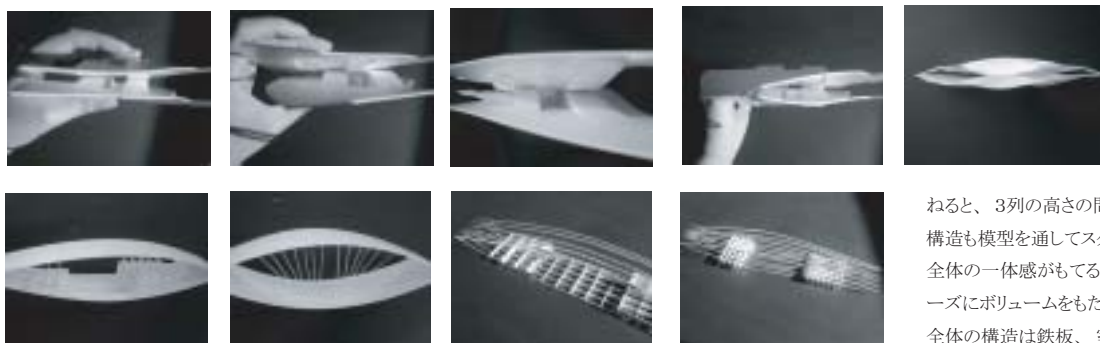


バズィ・ビーボ

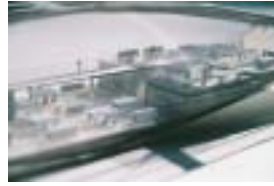
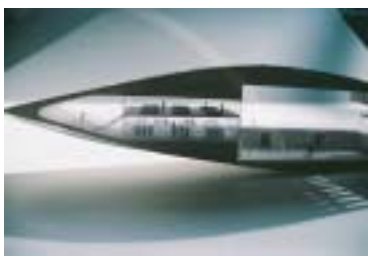


4つのレベルをもった室内。さまざまな視線のやりとりやそれぞれのレベルの楽しみ方がある。またレベルが違うことで、見通しのきく場所と見通しの悪い場所が生まれる。

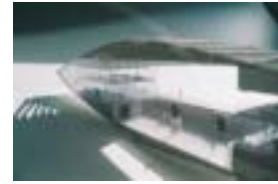
(INTERIOR DESIGN 空間の関係・イメージ・要素 参照)



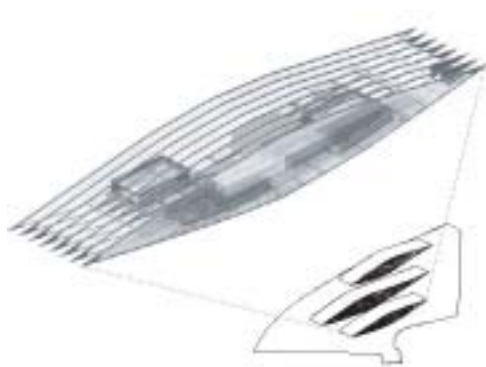
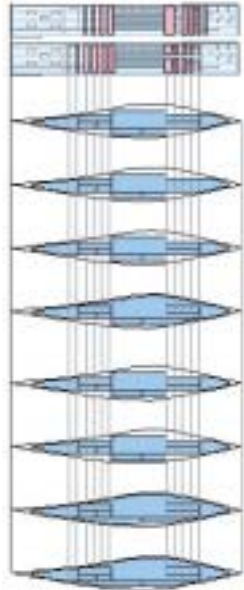
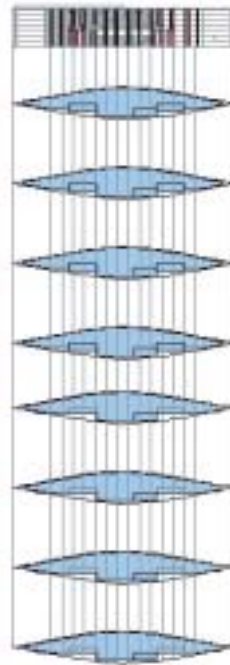
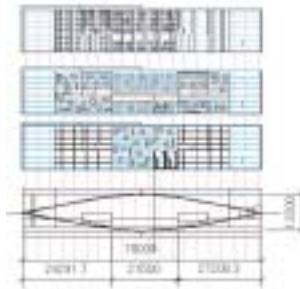
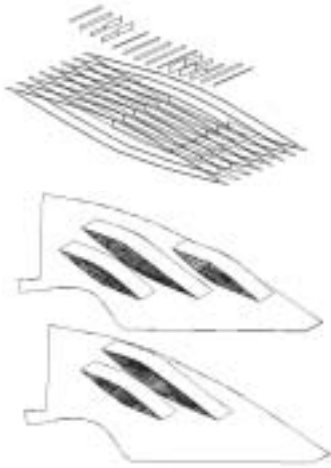
スタディ模型で空間イメージを確立していく。隆起する箇所や数、方向を変えたり、重ねてみたり、さまざまなパターンをスタディする。同じ3列隆起した模型をかさねると、半地下半屋外の空間ができた。そこからさらに1列ずらして、上3列、下2列で重ねると、3列の高さの問題が解決された。構造も模型を通してスタディをおこなった。いくつかのスタディ模型のうち、全体の一体感もてる格子状の模型がきれいにおさまった。斜面からスムーズにボリュームをもたせられるため、格子状の構造を選ぶことにした。全体の構造は鉄板、室内の格子は木材とする。



下段海側のボリューム
用途一BOOK CAFE



下段道路側のボリューム
用途一展示室・会議室



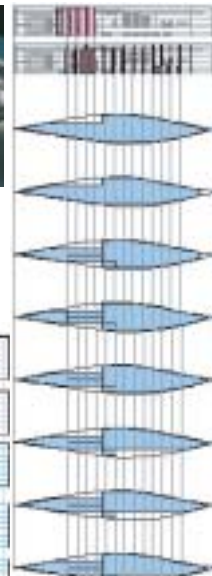
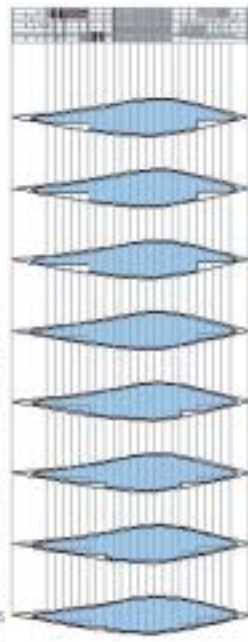
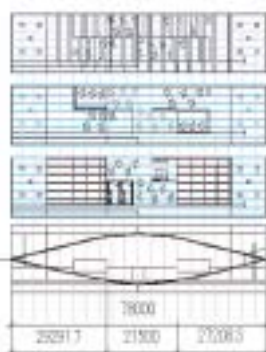
上段海側のボリューム
用途一レストラン



上段中央ボリューム
用途一大型展示用



上段道路側のボリューム
用途一パスポートセンター
国際交流センター





先端の展望
この先は海で、みなとみらいの
夜景が一望できる



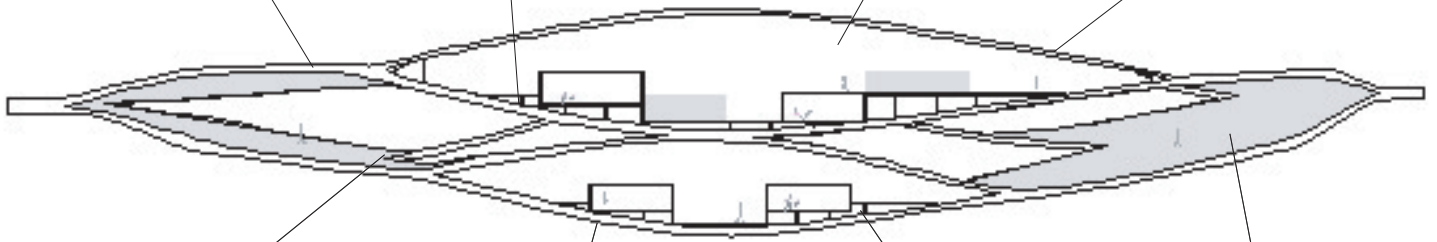
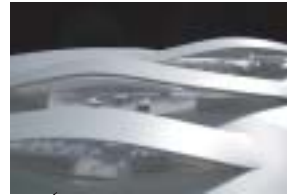
下から見上げた上段のボリューム
屋根の構造がまっすぐかかっている
のがみえる



展示場
斜面からボリュームがでてくる
これが展望にもなり、展示スペースにもなる



上の3つのボリューム
それぞれからみえる海の景色はかわってくる



ボリュームのおわり
地面から盛り上がるように
ボリュームがでる



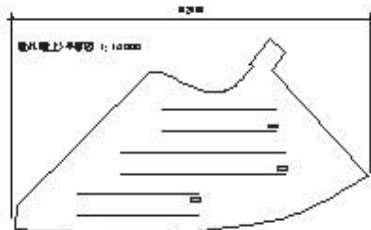
夜には、ボリュームから光が
洩れて、形が浮かび上がる



下段のBOOK CAFE
4つのレベルをもち
さまざまな空間性質がある



半屋外半地下の空間
赤レンガ、ベイブリッジ、大枝橋が望める



(右写真) 周辺模型
1:1000 模型



(下写真)
鳥瞰CG

